

展示品一覧

○ 大図（秋田県・八郎潟と男鹿半島）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第二十四之上〈自土崎／至能代／及鶴形〉」

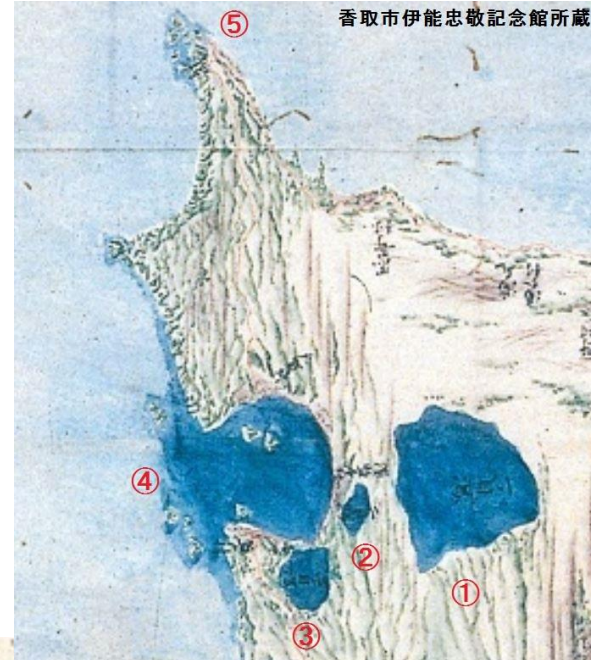
[国宝：地図・絵図類 番号40、文化元年、縮尺36,000分の1]

この大図は、第3次測量で、享和2（1802）年7月21日に久保田城下（現秋田市）を出立して八郎潟の東側を北上し、23日に能代に到着するまでの往路と、9月1日に能代を出立して男鹿半島の海岸線を南下し、9月5日に土崎に着くまでの復路の測量成果である。

測量日記によると、9月2日からは伊能忠敬、平山郡蔵らが八郎潟西岸を、伊能秀蔵、尾形慶助らが男鹿海浜を手分けしての測量となった。

この図で目を引くのは、大和絵風の雲でぼかされた八郎潟と、色鮮やかな① 一ノ目潟、② 二ノ目潟、③ 三ノ目潟、④ 戸賀湾の対称的な描き方である。また⑤ 入道崎の断崖絶壁感もよく描かれている。

下の図の⑥ 加茂村から⑦ 小浜村までの間には測線が引かれていない。測量日記にも「凡二里不測」と記された場所である。

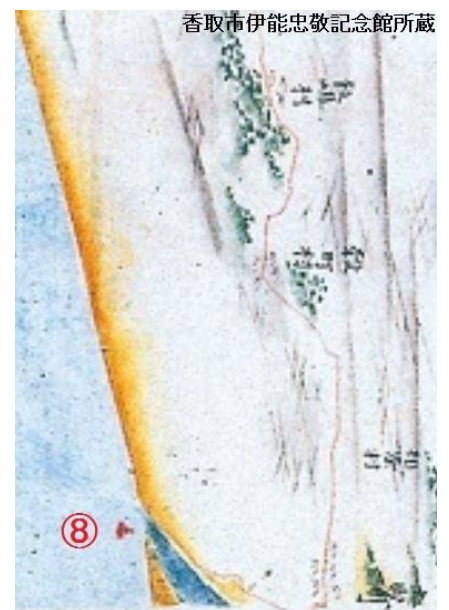


香取市伊能忠敬記念館所蔵



香取市伊能忠敬記念館所蔵

⑧ は土崎港である。雄物川河口に位置し、測量日記にも「諸国入舟おほし」とあるように北前船の寄港地として栄えた。延々と続く海岸砂丘については「海浜悉白砂。広さ十丁より二十丁に及ぶ。高卑砂原なり」と記録している。



香取市伊能忠敬記念館所蔵

この地域については、『会報』第50号の「伊能図の旅」に、星埜由尚氏による詳細な解説がある。

○ 中図（東北地方）

「陸奥・出羽沿海図」

[国宝：地図・絵図類 番号 8、文化元年、縮尺216,000分の1]

本初子午線（経度0度）を江戸とする文化元年中図である。図の右側には各地の緯度や江戸からの距離を記した表がある。コンパスローズが枠だけで彩色されていないなど、試作品とのことである。

○ 大図（神奈川県中西部）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第三〈自藤沢／至沼津／自片瀬／至熱海〉」

[国宝：地図・絵図類 番号 17、文化元年、縮尺36,000分の1]

第2次測量と第4次測量の成果の江ノ島から熱海にかけての範囲の海岸線と東海道が描かれている。右図の国会図書館の大日本沿海輿地全図第101図では真鶴岬の先端まで測線が伸びているが、これは第9次測量によるものであり、展示の大図では測線は描かれていない。同じく、芦ノ湖にも測線は無く、背景として絵画的に描かれている。「芦ノ湖一周四里三十町五十九間三尺」を測量し終えたのは文化13年3月7日のことである。

この大図では朱書きで文字を訂正した個所が目につく。「高座郡」の「座」の字は「**市**」が書き加えられ、「一ノ山新田」は「一」を「**市**」と訂正している。



○ 大図（三国街道）

「自高崎三国街道図 第一〈自高崎／至浅貝〉」

[国宝：地図・絵図類 番号 81、文化元年、縮尺36,000分の1]

第4次測量のときに、群馬県の高崎から新潟県の寺泊に至る三国街道を測量した成果である。享和3年10月3日の測量日記に「佐渡奉行其外御用、此所を往来す」とあるように、三国街道は江戸と越後、佐渡を結ぶ要路であった。新潟県の浅貝から、三国峠を越えて渋川をへて高崎の手前までを描く大図である。三国峠のあたりは測線が細かく折れ曲がり険しさが窺える。『会報』第63号に星埜由尚氏の「三国峠を越えた伊能忠敬」がある。なお、測量日記の翻刻では「浅貝」を「浅見」としているが、測量日記の原文、大図の表記からも「浅貝」が正しい。

○ 江戸府内下図（江戸城北西側）

「自室町一丁目至武蔵国豊島郡千駄ヶ谷村・麴町一丁目・駒込浅嘉町下図」

[国宝：地図・絵図類 番号 468 縮尺12,000分の1 法量47.8×78.6cm]

第十次測量の江戸府内図の下図である。測線は日本橋北側の室町一丁目入口から北西へ昌平橋を渡って神田明神鳥居をへて駒込浅嘉町まで続く。昌平橋から分岐した測線は西へ、聖堂、水戸殿（後楽園ドームあたり）をへて牛込御門付近で南西に転じ、四谷御門付近を経て千駄ヶ谷村まで伸びている。四谷御門から分岐した測線は、東へ麴町一丁目の半蔵門の前まで続く。

○ 江戸府内下図（江戸城南東側）

「自車町大木戸至室町一丁目築地十軒町・青山下図」

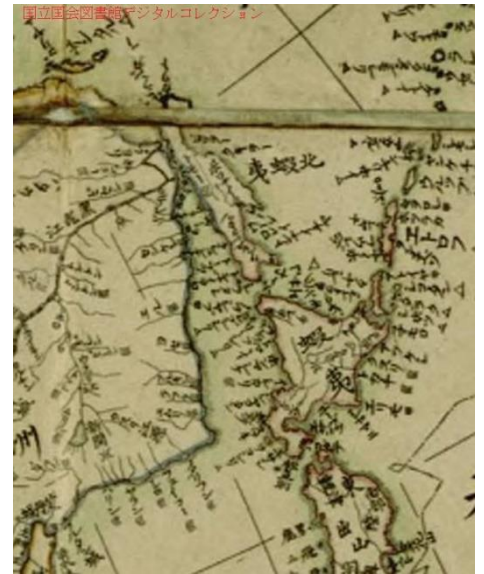
[国宝：地図・絵図類 番号 470 縮尺12,000分の1 法量63.9×47.5cm]

測線は、車町（高輪牛町）の大木戸に始まり、濱御殿をへて築地明石町、十軒町まで海岸線を北東にたどる。車町大木戸から東海道をたどる測線は浜松町、芝口一丁目を北上し、室町一丁目木戸で終わる。芝口一丁目から分岐した測線は西に向い赤坂御門の前から南西に折れ青山まで続く。途中には山王社も確認できる。

○ 「新訂万国全図」（高橋景保の世界地図）

[国宝：地図・絵図類 番号786]

国立公文書館のデジタルアーカイブで、文化7年に上呈された原本を見ることが出来る。国立国会図書館デジタルコレクションでは、今回展示されている文化13年公刊の亜欧堂田善の銅版図も見ることが出来る。以下、国会図書館の解題を引用する。「銅版筆彩 113×196cm。文化4年(1807)、幕命を受けた天文方高橋景保が、天文学者間重富や通辞馬場佐十郎の協力を得て完成した図で、序文年紀の文化7年(1810)に、ひとまず手書図(内閣文庫蔵)として上呈された。その後、さらに東アジア一帯の改訂が行われ、文化13年には銅版図として公刊された。刊行年の記載はないが、その時期は、大槻玄澤の『蘭訳梯航』(1816)および『紅葉山文庫[幕府図書館]新収書目』(内閣文庫蔵)の記事によって確認できる。間宮海峡を横断した間宮林蔵の探検(1809)の成果が生かされており、内容の新鮮さにおいて西洋製地図に比肩する傑作であった。しかも西洋でいう西半球を右側に置いて「東半球」と改称したり、京都中心の半球図を添えるなど、日本人の作品としての独自性の確立に意を用いている。」



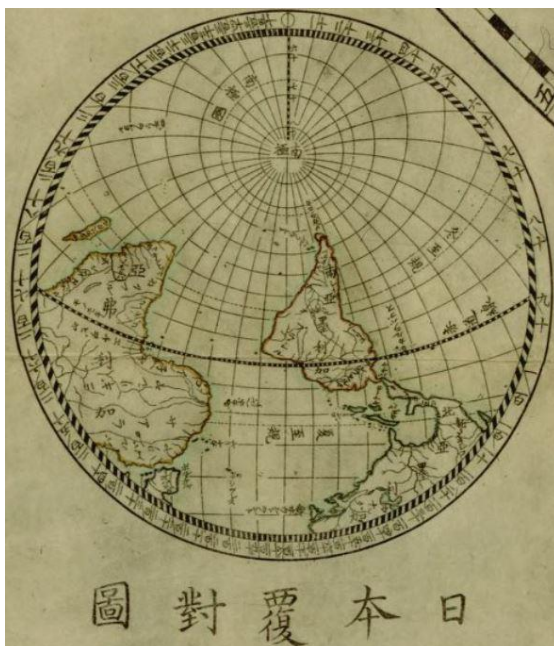
間宮海峡が描かれています



対蹠点の地図も添えられています



クック船長の航路が詳細に描き込まれています



○ 「伊能忠敬測量日記」 [国宝：文書・記録類 番号83]

文化7年7月15日の測量日記を展示している。測量日記は業務記録という性格から、忠敬個人の感想はあまり見られない。この日の日記は珍しく忠敬の本音が記されている。第7次測量（九州第1次測量）の途中、場所は鹿児島県の坊津岬である。

忠敬は「此の坊津岬は九州一の絶景と云い伝う。…眺望するに九州一とも云い難し。」と感想を述べている。もっとも、7月10日の測量日記には「此日より持病」、12日にも「持病」とあり、体調不良も原因かも知れない。

なお、右の図は、国会図書館デジタルコレクションから、広重の「六十余州名所図会 薩摩 坊ノ浦双剣石」である。



小特集：伊能忠誨（忠敬の嫡孫）関係資料

[孫にはめろめろ！] と題して、伊能忠敬の書状を2通展示

○ 「伊能忠敬書状」 [国宝：書状類 番号6]

この書状は、文化9（1812）年3月5日付で、宛先は娘の「妙薫尼」と嫁の「おりて女」である。第8次測量（九州2次測量）の途中、屋久島・種子島測量の直前に鹿児島城下から出された。書状の終わりに、孫の三治郎（後の忠誨）と鉄之助兄弟について、間宮林蔵の助言の通り、悪遊びをさせず、温和に書物を指南するよう、おりてと申し合せてお育てなさいとアドバイスした上で、「両孫の内にて、我に似寄せ候ように致したく候」と記している。三治郎、鉄之助兄弟に、自分と同様に天文暦学の道を歩むことを期待している。忠敬は67歳、忠誨は6歳、鉄之助は2歳である。

なお、屋久島・種子島測量を済ませ、5月25日付で鹿児島城下から出した妙薫とおりて宛の手紙では、三治郎を隣村の津宮村の久保木清淵のもとに手習いに遣わしたとの知らせに、「大いに宜し候」と答えている。

○ 「伊能忠敬書状」 [国宝：書状類 番号7]

この書状は、文化10(1813)年3月5日付で、長崎県平戸市の沖に浮かぶ的山大島の神ノ浦から妙薫に宛てた書状である。その文末に、三治郎について、「行々は弟子に相成るべく候」と述べている。そして、十一月に江戸に帰ったら、二人の孫に会える事を楽しみにしている。三治郎については、来年は「深川に留置候様にも致すべく候」とあり、江戸で膝下におき、忠敬自ら指導するというのである。母親のおりてに宜しく頼んで欲しいと書状を結んでいる。

もっとも、文化14(1817)年3月16日付の妙薫宛の書状では、11歳になった三治郎について、我が手に余り、難かしき者なので、昌平黌の儒者佐藤一斎へ内弟子として預けるとギブアップしている。

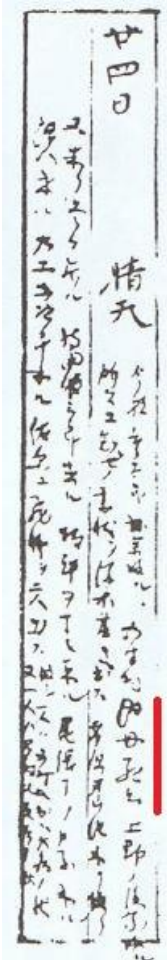
進路に悩む忠誨の姿を日記で紹介

○ 「伊能忠誨日記」 [国宝：文書・記録類 番号206]

三治郎は文化10年に父の景敬を、文化15年には祖父の忠敬、母のリテ、弟の鉄之助を相継いで失い、伯母の妙薫の庇護のもと江戸で勉学に励んでいた。足立左内から昌平黌の吟味に出てはどうかと勧められたほどである。文政3年、三次郎は数え15歳となり、佐藤一斎を通して林大学頭に願い、忠誨を名乗るとし、通称を三郎右衛門とした。展示されているのは文政3年11月21日の日記である。祖父忠敬のあとを継いで、江戸で天文暦学の道を進むのか、父親景敬の後を継いで、佐原村随一の旧家伊能家の当主としての生き方を取るかの選択を迫られていた。伯母妙薫の思い、高橋景保の考え、佐原村の伊能家親族の願い、領主の旗本津田家の立場が交錯する中での選択である。日記には「予、祖父の跡を相続、又は父の跡を相続、心定まらず。先祖の前に御くじを取る。佐原住居父の跡を相続するくじ出る也。」とある。

文政4年、忠誨は大日本沿海輿地全図が完成し上呈したのち、9月4日に佐原村長百姓伊能三郎右衛門として祖父忠敬の病死届を提出した。その年の暮れには幕府から高橋景保の手付手伝を命じられたが、翌年夏の妙薫の死を期に佐原への帰村を決断した。「手付手伝当分御免。帰村の上、在所御用勤むべき」旨、若年寄の「達」をうけ、忠誨は、佐原で家業の傍ら天体観測と星図作成、江戸で2、3ヶ月天文方へという二重生活のなかで、21歳で夭折した。ここで忠敬直系の血筋は途絶えた。

忠誨の日記については『会報』の第32号から39号まで佐久間達夫氏による翻刻が掲載されている。また第48号には忠誨を紹介する論考が掲載されている。右図は会報第37号に掲載された文政5年8月24日の忠誨の日記で、朱線部に「伯母死去」とある。



未完の天文暦学者伊能忠誨の蔵書

- 「下編図解 乾」 写本1冊 [国宝：典籍類 番号509]
- 「下編図解 坤」 写本1冊 [国宝：典籍類 番号510]
- 「交食法」 写本1冊 [国宝：典籍類 番号511]
- 「二法諸用数」 写本1冊 [国宝：典籍類 番号512]
- 「刪補授時曆法」 写本1冊 [国宝：典籍類 番号516]
- 「消長法用数」 写本1冊 [国宝：典籍類 番号517]
- 「日本和蘭対朔曆法」 写本1冊 [国宝：典籍類 番号522]

太陽暦でオランダの文政5年1月1日が、太陰太陽暦の日本ではいつにあたるかを足立信頭が推算した部分が展示されている。

伊能忠誨の星図と望遠鏡

○ 「観星鏡 (小)」 [国宝：器具類 番号30]

大阪・貝塚の岩橋善兵衛が製作した望遠鏡で、一閑張の鏡筒4筒からなる。外側1筒のみ朱で、他3筒は黒色、唐草文が施されている。なお、箱1個が付属しており、大谷亮吉の『伊能忠敬』によると、「千里鏡 日本測量御用 后世子々孫々可所持者也 孫忠誨謹書之」と記されていたとあり、忠敬から忠誨へと受け継がれた望遠鏡である。

○ 「小方円星図」 [国宝：文書・記録類 番号485]

星座は中国流のものだが、星の等級を星の印の違いで表示している。忠誨の星図については『会報』第43号所収の荻原哲夫氏の「もうひとつの伊能図—忠誨星図—」が詳しい。